

# 新聞投稿短歌にみる海外在住日本人女性の生活世界と望郷

——人間主義地理学からのアプローチ——

齋藤元子

## 1. はじめに

本研究は、今日海外に在住する日本人女性が新聞に投稿した短歌をモチーフとして、彼女たちの生活世界と日本への望郷の思いを洞察し記述することを目的とする。

現在海外に在住する日本人は約68万人。そのうち女性は49%の約33万人である<sup>1)</sup>。日本人の海外への移住は明治時代に始まる。その歴史をさかのぼってみると、明治大正期にアメリカやカナダなどへ移民として渡った日本人男性のもとへ、相手の写真だけを頼りに嫁いでいった「写真花嫁」、第二次世界大戦後進駐軍の兵士と結ばれてアメリカなどに渡っていった「戦争花嫁」、そして今日世界各地に派遣されている日本企業の駐在員の妻たち、といった女性の姿が浮かび上がってくる。近年女性史や女性学が盛んになるにつれ、これら日本人女性についての研究も散見されはじめている。

しかし地理学においては、海外に在住する日本人女性に関する研究はまだ見当たらない。社会地理学や経済地理学の分野で、海外の日本人を扱った研究としては、エスニック・コミュニティとしてのアメリカ日系人社会の研究(杉浦, 1991など)や在外日本企業の研究(高津, 1991など)といったものが認められる。だが、残念ながら、これらの研究からは女性の存在はほとんど見えてこない。

本研究は、他の学問分野においては徐々に注目され始めてはいるものの、地理学が未だ目を向けていない海外在住日本人女性の存在に、彼女たちの生活世界にみる日本への望郷という視点から地理学的に光をあてようと試みるものである。生活世界と望郷への地理学的なアプローチとは、人間(海外在住日本人女性)と場所(在住国あるいは祖国日本)との主観的な関係を洞察することを意味している。生活世界は、日常生活を形作る物質的な要素のみならず、その背後にある精神的な要

素によって構成される世界である。また望郷とは、故郷を懐かしく思う気持ちであると広く定義できる。本研究においては、望郷を精神医学などの分野が研究を行っているホームシックやカルチャーショックなどと関係づけたネガティブな意識<sup>2)</sup>としてよりもむしろ、自らの意志により積極的に祖国日本との関わりを求めていこうとするポジティブな意識として捉えてみたい。

海外在住日本人女性の生活世界と望郷への地理学的アプローチとして、本研究は人間主義地理学からのアプローチを試みる。人間主義地理学は、人間という主体からみた主観的な空間や場所の意味や価値を洞察し記述しようとする地理学である。生活世界と望郷は、現実に生きる場所と過去に生きた場所という違いはあるが、ともに人間が場所と深く関わることによって形作られる。しかもその関わり方は十人十色である。つまり、生活世界や望郷には、各人の主観的な場所の意味や価値が強く反映される。海外在住日本人女性の生活世界や望郷の思いは、彼女たちにとっての在住国や祖国という場所の意味や価値を映し出す。それを洞察する方法として、人間主義地理学はふさわしいと考える。

## 2. 人間主義地理学の概念と方法

人間主義地理学は、1960年代の計量革命がもたらした定量的データを多用し仮説の検証をめざす実証主義偏向の地理学に対するアンチテーゼとして、70年代初頭からトゥアン(Tuan, Yi-Fu)、レルフ(Relph, E.), バッティマー(Buttimer, A.)ら英語圏の地理学者によって唱えられた研究の潮流である<sup>3)</sup>。実存主義現象学<sup>4)</sup>の概念を援用し、人間という主体からみた主観的空間の意味や価値を洞察し記述しようとする人間主義地理学は、竹内(1979)や山野(1979)らによって日本にも紹介され、近年では人間主義地理学、人文主義地理学、あるいは現象学的地理学を標榜する研究が報告され始めている(阿部, 1990・内田, 1990・福

田, 1991など)。ここでは、本研究のアプローチという点に則し、人間主義地理学によって提示されたいくつかの概念や方法を紹介する。

#### (1) 根づくこと・根無し草/内部者・外部者

実存主義現象学の影響を受けたレルフ (1976) は、人間と場所との実存的な関わりの状況を、「根づくこと (rootedness)」：「根無し草 (uprootedness)」, 「内側性 (insideness)」：「外側性 (outsideness)」, 「場所性 (place)」：「没場所性 (placelessness)」という3組の二項対立で示した<sup>5)</sup>。この概念は、人間主義地理学のアプローチとして、その後いくつかの研究に応用されている。例えば、Godkin (1980) は「根づくこと (rootedness)」：「根無し草 (uprootedness)」の概念を用いて、アルコール依存症患者と場所との関わりを洞察し、場所において個人のアイデンティティを確立させることや過去における場所とのポジティブな関わりを再認識させることが治療上有効であることを提示した。また、Seamon (1985) は19世紀のスウェーデンからアメリカへの移住をテーマにした小説を題材に、移民が新しい居住地における外部者 (outsider) から内部者 (insider) へと移行するプロセスを洞察している。日本でも福田 (1991) が林芙美子の『放浪記』を題材に、主人公の放浪と定着の人生を「根づくこと」：「根無し草」および「内側性」：「外側性」の観点から論じている。Porteous (1985) はレルフの概念を発展させ、「ホーム (home)」：「遠隔 (away)」と「内部者 (insider)」：「外部者 (outsider)」からなるマトリックスを提示した。それを用い、文学作品に例を求めながら、4通りの状況における人間と場所との関係や場所の経験の差異を論じている。

海外に在住する日本人女性を研究対象とする本研究においては、「根づくこと」：「根無し草」が、彼女たちの生活世界ならびに望郷を洞察する際の最も重要なポイントとなる。また、根の在りかを自覚することにより発生するであろう「内部者」：「外部者」の意識も同様に重要である。Samuels (1978) は、実存主義を疎外 (alienation) の哲学と呼び、実存主義地理学は疎外の地理学、つまり根 (root) を追求する地理学であるとした。この「根」というものに対して最も強い

こだわりを示したのは、おそらくフランスのユダヤ人思想家シモーヌ・ヴェーユであろう。34才の若さでこの世を去ったヴェーユ<sup>6)</sup>の精神的な遺書とも言われる『根をもつこと』(1967)において、彼女は「根づくこと」こそ人間の魂にとって最も重要な要求であると主張した。人間は誰でも、道徳的、知的、霊的生活のほとんどすべてを、自分が自然な形で参加している環境を介して受け取ろうとする要求を抱いている。この環境が軍事的征服などにより破壊されたとき、「根こぎ」の病が発生するとヴェーユは言う。海外への移住も、それまで自分が自然な形で参加していた環境から自らを引き離すという行為をとる。よって、そこには「根こぎ」の病が発生する可能性がある。異国の地において、新たな根を形成しているか否かが「根づくこと」：「根無し草」さらには「内部者」：「外部者」の洞察の基盤となるであろう。

#### (2) トポフィリア・トポフィビア

レルフとともに人間主義地理学を代表するトゥアン (1974) は、場所に対する愛着を「トポフィリア (topophilia)」という言葉で表現した<sup>7)</sup>。トポフィリアの対象となる場所は実に多彩である。それは家の中の場所といった私的で小さな空間から、国民国家といった社会的な空間までを包摂する。また、建造物のような可視的なもののみならず、家庭のような主観的に把握される抽象的な場所もが、その対象となる。さらに、場所への愛着は、「場所への愛情」と言い換えられるような肯定的な感情だけではなく、時には「場所へのしこり」と言い換えられるような否定的な感情をも意味する<sup>8)</sup>。

本研究のテーマである望郷も、トポフィリアの一種である。それは遠く離れた故郷という場所に対する愛着である。望郷の対象となる場所は、郷里の家から日本という祖国までさまざまなスケールが予想される。また、特定の風景のように具体的なものもあれば、故郷の暖かさといったような表現の主観的かつ抽象的な知覚もあるだろう。それらは、いずれもトポフィリアの様相である。

#### (3) 原風景/通感

日本においては、人間と場所との結び付きやその意味を洞察することは、むしろ文学の世界にお

いて積極的になされてきた（奥野，1972＜増補1989＞・前田，1982・加藤，1990など）。いずれも文学作品をモチーフにして登場人物と場所との関わりが論じられている。奥野健男（1972）の著作が喚起した原風景論は、地理学においても人間主義的アプローチとして注目されている（大島・浮田・佐々木，1990，p.137）。原風景とは魂の故郷とも言える自己形成空間・心象風景を意味し、不思議な懐かしさをもって思い出されるものである（奥野，1972，p.18）。原風景は、生まれてから8才頃までの環境によって無意識に形成され深層意識のなかに固着するものと、20才前後の最も感受性の強い人格形成期に受ける衝撃的体験や感銘によって形作られるものがある（同，p.55）。また原風景には、個人的なものや民族や風土に共通したものとの二つのタイプがある（同，p.56）。後者のタイプとして、日本人が共有する原風景を探る手がかりは、フランス人地理学者ベルク（1988）の論ずる「自然と文化の通態」の観念にあると言えよう。彼は日本の自然と人間あるいは文化との関係が、相対する西歐的の二元論ではなく、不可分の交流からなる総体としての風土性を形成していると指摘する。ここには哲学者のヘルダーや和辻哲郎によって論じられた風土論からの発展がうかがえる。

ベルク（Berque, A）は「自然と文化の通態」という観念を学問的な概念として洗練させるとともに、それを適用したケース・スタディを同時に展開している。そのなかに、気象、山水、草木といった人間を取り巻く自然環境の主要要素と人間がそれらに与える意味の相互交流が、日本という風土においていかになされているかを、俳句を中心とした文学作品に例を取りながら論じた箇所がある。小説、短歌という文学作品を題材として、海外に在住する日本人女性の抱く望郷の風景を洞察しようとする本研究にとって、そこには多くの示唆が含まれている。主要な点を要約しておこう。

日本の風土を特徴づける自然と人間の通態は、「風景の喚起作用」というものによく表れている。例えば、雨を表現する日本語は夕立、時雨など多数存在する。しかも、一語一語がある決まった季節や時刻に降る雨だけを意味する。それらの言葉は、特定の感情やイメージと結び付き、コード化されて、ある一つの風景の中にはめこまれる。そ

の典型が俳句の季語である。季語はその一語によって、特定の風景を読み手に喚起させる力をもっている（ベルク，1988，pp. 12-17）。

「風景の喚起作用」は視覚的なものにとどまらない。例えば、俳句の夏の季語である風鈴は、その言葉が句に込められることによって、読み手に涼風を呼び覚ます。秋のススキは、その枯れ行く運命から、憂いを与える。「風景の喚起作用」により、ある一つの感覚を共有するのである（同，p. 28・34）。

気象現象などを表現する擬声語・擬態語の存在は、ベルクの解釈によれば、日本人のそれに対する鋭敏な感受性の表れであり、そのこともまた「風景の喚起作用」の働きを活発にする。例えば、雪の降り方は「チラチラ」「コンコン」「ズンズン」といった言葉で表現される。これらは降り具合や積もり具合によって微妙に使い分けられ、白々とその様子が一つの風景となってイメージされるのである（同，pp. 37-38）。

このような「風景の喚起作用」が機能する背景には、以下の事実が存在する。日本の文化が極度に繊細な心配りによって数世紀にわたり自然との関係をコード化してきたこと、そのことを通じて独自の自然を作り上げたこと、さらには、そのような母型があらゆる日本人に備わっていること、である。したがって、どのような季語でも、初めて耳にした時でさえ、反応の回路がすでにあって、受け取る用意ができており、その回路を通じて、その人固有の自然と社会に対する関係と調和を保ちつつ、すんなりと耳に入るわけである（同，pp. 22-23）。

「風景の喚起作用」は、俳句の季語にとりわけ顕著であるが、それは日本の社会のあらゆる層において機能している。自然と社会との関係において記号的装置が存在し、これが個々人の本性＝自然を呼び覚まし、現実化する。そしてこれと不可分に、個人は逆にこの装置を自身の生によって活性化し、自身の肉体をそこに具象化させるのである（同，p.23）。この営みのなかに、自然と人間が絶え間なく相互交流をくり返す「通態性」を見ることが出来る。したがって、海外に在住する日本人女性が白らの望郷の思いを短歌に託すとき、そこには「風景の喚起作用」が見いだせるのではないだろうか。

#### (4) サウンドスケープ/スメルスケープ……

人間は外界に対処する上で五感のうち多くを視覚に依存してはいるが、現実にはすべての感覚を通じて外界を同時に知覚する。これは哲学者の間で論じられてきた諸感覚の体性感覚的統合つまり共通感覚による知覚（中村，1979）である。視覚が主体となって認知される景観をランドスケープとするならば、聴覚を主体とするサウンドスケープや嗅覚を主体とするスメルスケープも同時に存在する。これらも環境知覚の重要な要素であるという考えが、地理学者のポコックとポーティウス（ポコック・ポーティウス，1992，pp. 45-109）によって主張されている。

サウンドスケープは70年代初頭カナダの環境音楽家シェーファー（1986）が提唱した概念が基本となっている。それは特定の地域の音やそれを取り巻く環境が個人や共同体とどう関係しているかを問題にする考え方である。シェーファーは世界各地の音の調査をもとにサウンドスケープの歴史や風土性を論じている。ポコックとポーティウスの研究はこのシェーファーの業績に負う点が多い。またシェーファー自らも地理学者が編集する論文集に寄稿している（Schafer，1985）ところからも、英語圏の地理学界においては、サウンドスケープの概念が浸透しつつあるようにみえる。

一方スメルスケープの概念は、ポーティウス（ポコック・ポーティウス，1992，pp. 111-151）によって提唱された。そこでは、視覚的な認識が時間と共に急激に低下して行くのに対し、匂いはほぼ同じ程度の正確さをもって一年後に思い出すことができるという心理学の実験結果や、小説や旅行記には匂いの描写によって特定な場所をフラッシュバックさせるという記述パターンが多いことが注目されている。彼はスメルスケープにレルフの内部者：外部者（insider：outsider）の概念を適用している。ある匂いに対してなじみのある内部者となじみのない外部者という二項対立で存在を規定し、匂いに対して敏感な存在は、その匂いから空間的あるいは時間的に隔たっている外部者であると述べている。

本研究においても、望郷の風景を単に視覚的なランドスケープに限定せず、サウンドスケープやスメルスケープの面からも洞察する。特に日本には、風鈴や祭り囃といった季節感や郷土と結び付

いた固有の音、あるいは匂いによって風景のイメージを描き出すという世界でも類を見ない香道という嗅覚芸術の伝統文化が存在する。この点からも望郷につながるサウンドスケープやスメルスケープの存在が推測される。

### 3. 海外在住日本人女性と短歌

千年以上に及ぶ短歌の歴史において、古典和歌の和泉式部や紫式部、近代短歌の与謝野晶子など傑出した女流歌人の名をあげることができる。しかし、近年ほど多くの女性の歌人に支えられて、短歌が世に受け入れられ隆盛となった時代はない<sup>9</sup>。1987年に出版された俵万智歌集『サラダ記念日』は、230万部の売上げという短歌史上驚異的な数字を記録し、短歌ブームの火付け役となった<sup>10</sup>。それ以来、新聞の投稿短歌欄には海外からも含め、幅広い年齢層の女性の作品が見られるようになる。

しかし海外からの投稿の増加は、日本の短歌ブームによるよりもむしろ、ほぼ同じ時期に大手全国紙が国際衛星版の発行を相次いで開始したことが大きく影響していると考えられる。国際衛星版の発行により、投稿短歌欄も多くの海外に在住する日本人の目に触れるようになった。そして、以前から盛んであった海外在住日本人の歌づくりが、発表の場を日本の新聞にも広げたものと受け止められる<sup>11</sup>。海外に在住する日本人が、遠い祖国への望郷の思いを短歌に託すという行為は、明治から昭和の初めまで続いた日系移民の頃から盛んに行われていた。移民の作品は当時現地で発行されていた日本語新聞の投稿短歌欄に見ることができる<sup>12</sup>。

現代においても、アメリカ本土を例にとると、海外日系新聞協会に登録されている日本語新聞は6紙あるが<sup>13</sup>、いずれも短歌の欄を設けている。そして掲載されている作品のほとんどが女性によるものである。コロラド州デンバー発行のロッキー時報とシカゴ発行のシカゴ新報に定期的に作品を掲載している新生短歌会（デンバー）と湖畔短歌勉強会（シカゴ）について筆者が調査を行ったところ、会員数は新生短歌会が女性16名・男性1名、湖畔短歌勉強会が女性11名・男性2名といずれも女性が圧倒的に多い。女性会員の平均年齢

は新生短歌会が60才・湖畔短歌勉強会が67才、平均在米年数は両会ともに30年以上であった。また活動内容は新聞への寄稿の他に、両会とも毎月1回歌会を開き、歌歴の長い会員が指導にあたっている。湖畔短歌勉強会は東洋系シニアシチズン専用アパートの住民を中心にして結成され、アパート内で催される七夕会の折には、箒かざりに自らの作品をしたためた短冊をつるすことを楽しみにしている。

朝日新聞日曜版に掲載される投稿短歌欄『朝日歌壇』には、この5年間で海外からの作品498首が載せられた。そのうち354首、71%が女性の作品である。海外に在住する女性から寄せられた作品の内容傾向をみると、異国の生活世界を歌ったものが最も多い。これに次いで、祖国日本への望郷の思いや二つの国の間に揺れる心を歌ったものが目立つ。生活世界や望郷の歌は、いわば“個の世界”の歌である。これに対して、個の世界の歌に比べ数は少ないが、“社会詠”と呼ばれるジャンルに属する歌も見られる。在住国が直面している政治・社会の状況や、距離を置くことによって見えてくる日本社会の長所短所などを、自分はどうとらえ、いかに考えるかを短歌に表現したものである。

利点のみ喧伝されてなだれこむキャピタリズムをやはり怪しむ

プラハ クロウスカ美莎子

民主化が進行する旧チェコスロバキア。祖国日本を通して資本主義の功罪を知る作者は、資本主義の発する甘い言葉に踊らされている民衆に警告を投げかけている。

慰安婦の責め問われし日にも学びおり韓国の友と肩よせあいて アメリカ 守谷栄子

旧日本軍によって辛い体験を強いられた女性たちが声をあげはじめた。作者は日本人という加害者として、また女性という同じ被害者として、この声を真摯に受け止めている。

時々刻々とさまざまなメディアを通じて、われわれの手許へ届けられる社会の激動をいかに歌うか、世界と自己とのとらえかたが、これまでも

増し大きな課題として、現在の短歌界では語られるようになった。にもかかわらず、女性ほどちらかく言えば社会現象を作品化することが得手ではなく、女性歌人の社会詠はやや不振の感がある<sup>14)</sup>。このような短歌界の状況の中で、海外に在住する女性が積極的に社会詠に挑んでいる姿勢は評価できる。だが、ストレートな表現が災いしてか、作品のもつ趣きという点では、自然や風景に自らの思いを託して個の世界を歌い上げた抒情歌には、まだ及ばないという印象をうける。

『朝日歌壇』の投稿者には、こつこつと作品を送り続けている人が多い。海外に在住する女性の作品に筆者が注目するようになったのは、短歌への関心から『朝日歌壇』を読むなかで、数人の海外在住女性の作品にいつも心引かれるからである。それは主に祖国日本への望郷の思いを歌ったものである。同じ作者の歌を時折目にするのは、彼女たちの生活世界を少しづつ垣間見て行く気持ちである。本研究においては、海外在住日本人女性の望郷を洞察する一題材として、過去5年間に『朝日歌壇』に掲載された海外からの作品の中から、筆者が特に強い印象をもって受け止めてきた数人の作品を紹介したい。『朝日歌壇』には、毎週約2千首の作品が寄せられる。そこから近藤芳美、佐佐木幸綱、島田修二、馬場あき子の4名のプロの歌人が各々10首を選歌し、計40首（共選され重複する場合あり）が新聞に掲載される。掲載作品は、このようなプロセスを経て選ばれたものなので、選者の嗜好が反映されていることは否めないが、技術的な意味においては一定の水準に達しているといえる。

短歌、特に自然や風景に自らの思いを託して歌う抒情歌は、人間主義地理学の視点からみると、ベルクという自然と人間の通態の表象である。そこには自然と人間の不可分の一体感が存在する。望郷とは、故郷あるいは祖国とよべる場所と自分との過去における実存的な関係を回顧する行為である。よって望郷の歌は、どのような日本の自然や風景が祖国と自分との実存的な関係を象徴させているかを洞察する優れた手がかりとなるだろう。なお、作品の解釈は筆者個人による。

#### 4. アンソロジー ～望郷の歌～

##### (1) 春日あかねさん（メキシコ在住）

山つつじやおきな草咲くふるさが顕ち来る  
今日よわらび茹でつぐ

ほととぎすここに鳴かねど渡鳥聞きつつ蒔  
きぬ故郷の野沢菜

面映ゆく敬老会の祝宴に座して我が過去移  
民一世

五十五年メヒコに住みし老われに新聞は伝  
うふきのとうの味

葱坊主季をかまわず立ち並ぶメヒコの畑の  
日本種のねぎ

遠来の孫の手とればすでにして働き者の手  
となりていぬ

春日あかねさんはメキシコ在住の日系移民一世である。祖国を離れて55年、今では三世の孫が働き手にまで成長している。外務省の調査によると、彼女が日本を発った昭和10年前後、毎年年間約1万の人々が海外移民として海を渡った。このうち何人がメキシコを目指したかは定かではないが、現在メキシコには約千人の日系人がいる<sup>15)</sup>。掲出歌は、メキシコという異国に渡り、その日系人社会を生き抜いてきた彼女の歴史を感じさせる。

あかねさんの故郷は信州であろう。春には山つつじやおきな草の花が咲き、ふきのとうが芽吹き、夏にはほととぎすが空を渡っていった山野の風景が、彼女の望郷の原風景である。おきな草はキンポウゲ科の多年草で、本州・四国・九州の山野の草原に見られ、3月から5月ごろに暗赤褐色の花をつける。彼女の原風景は、共通感覚によって構成されている。それは視覚的にのみ思い出す故郷の風景ではない。ほととぎすの鳴き声やふきのとうの味も忘れられない望郷の風景である。サウンドスケープやスマイルスケープがそこには同時

に存在している。

あかねさんは、家庭菜園でわらび、野沢菜、ねぎなどの日本の野菜を作っている。55年を経ても日本の味は忘れられないに違いない。異国では手に入らない野菜を自ら育てることは、テイストスケープへのこだわりである。だが、それに加えて、日本の野菜に彩られた庭の一隅の空間は、彼女にとっての小さな日本という空間なのである。山つつじやおきな草が咲く故郷の風景が心に立ち上がってくる時、庭で採れたわらびを茹でることで故郷とのつながりを実感する。また、異国メキシコの空を飛び行く渡り鳥の声を聞きながら野沢菜の種を蒔く作業は、かつてほととぎすの鳴く声を聞きつつ故郷の土に同じ野沢菜の種を蒔いた日々を追体験することである。家庭菜園は彼女にとって、故郷という場所を間接的、代償的な方法で経験するためのものなのである。レルフはこのような経験を代償の内側性と呼んでいる（レルフ、1991, pp. 95-6）。

##### (2) モーレンキャンプふゆこさん（オランダ在住）

秋茄子や思郷の藍はとろ火にて一人静かに  
コトコトと煮む

ほこほこと南瓜の黄の裡に燃ゆる望郷ひと  
つしずめかねつつ

「遥かなる故国」と呼べりどんぐりを拾えば  
「故国」手の中に在り

KAKIひとつ買物かごに忍ばせて豊かな帰化  
を遂げんとぞ思う

桑の実も在りてうれしき祖国かな桑の実を  
子らに何と語るむ

異文化の狭間に揺れる樺一本我がなつかし  
き新風土とせむ

モーレンキャンプふゆこさんの望郷の歌は、具体的な故郷の風景や思い出を彷彿とさせるような歌ではない。しかし、秋茄子、南瓜、どんぐり、柿、桑の実といった野菜や植物に象徴された望郷

は、おそらくほとんどの日本人が反射的に共感できる世界である。これはまさにベルク（1988）の指摘する「風景の喚起作用」によるものである。日本人は繊細な心配りをもって、数世紀にわたり自然との関係をコード化してきた（ベルク, 1988, p.22）。それは現代の日本人においても機能している。秋茄子や南瓜など望郷を象徴する言葉はコード化され、回路を通じて読み手に届けられる。そして読み手の脳裏には、自ずと一つの風景が立ち現れてくるのである。

茄子や南瓜は日本固有の野菜ではない。しかしここで歌われている茄子や南瓜は、読み手一人一人が固有に思い描くことができる日本的な風景を喚起せずにはおかない。それは茄子紺と呼ばれる独特の藍色の色彩や、醤油で味つけられた匂いなどと結び付いたものである。あるものは調理されてゆく秋茄子や南瓜の匂いが立ち込めていた台所の風景かも知れないし、またあるものはそれらが盛られた大皿を家族でつつき合った食卓の情景かもしれない。このような風景は、激情的な望郷の念によって突如浮かんでくるというよりもむしろ、「コトコト」「ほこほこ」といった言葉が示すように、茄子や南瓜を目にしたたり食した折りにふつふつと沸いてくる風景、心の奥底にいつも潜んでいる望郷の原風景であろう。例えば、異国でのハローウィンの日、細工された巨大な南瓜を目の当たりにして、手の平に乗るような小ぶりの日本の南瓜が懐かしく思い出され、南瓜にまつわる昔の風景がふと浮かび上がってくるということも十分にありうる。

KAKIの歌では、以下のような逸話を思い出した。今でも古い家の庭には、大きな柿の木がよくあるが、なんでも昔は、嫁入りの際に柿の苗木を持って行き、それを嫁ぎ先に植えたという。その嫁が一生を終えたとき、大木になっている柿の枝が、火葬の薪やお骨を拾う箸にされたそうだ。つまり、柿の木は女の生涯を象徴していたのだ。柿と女性は豊かな実りをもたらず点で共通しており、それで柿が女性のシンボルになったと考えられる<sup>10</sup>。ふゆこさんがこんな昔の風習を知っていたかは定かでない。だが、買物かごの中にひそかにある柿は祖国への望郷の思いであり、また彼女自身の日本人女性としてのアイデンティティへの愛着である。日本を離れ異国に帰化した彼女が、

心ひそかにもち続けている祖国への望郷の思いを、柿への愛着に象徴させているのは興味深い。しかし、彼女が心に忍ばせているのは「柿」ではなく「KAKI」である。KAKIは作者の望郷の思いであり、かつ柿をKAKIに変えて生きて行く作者の帰化の志でもある。白樺に象徴されるオランダの風景を、自分が根を下ろした場所の風景として心に刻んでゆく決意を歌った最後の歌にも、その志はよく表れている。

### (3) ルンドストロム和代さん

(スウェーデン在住)

遠ざかる帰雁の声に「カリガネ」と声にし  
てみる異国語のごとく

行く雲にすがりつきたき時ありて心なだむ  
る落葉のパス停

望郷の念には、祖国という風土の記憶を手繰り寄せようとする思いと、我が身を祖国の風土の中に送り返そうとする思いがあるように思う。前者は心象風景として、懐かしい故郷の風景が心に立ち現れてくるような場合であり、後者は移り行くものに我が身を託して、帰郷の思いにふけるような場合である。ルンドストロム和代さんの歌は、後者の典型である。渡り鳥や流れ雲といった大空を移り行くものには、昔からどれほど多くの異邦人が帰郷の思いをはせてきたことだろう。

現代では飛行機も格好の代償物といえる。異国に住む日本人がホームシックにかかった時、空港で日本行きの飛行機を眺めていると心が安らいだという話を何回か耳にしたことがある。また数年前、筆者がニュージーランドに1年ほど滞在していた時、知人の送迎のため空港に行く度、いつもサモアやトンガなどからの移民とおぼしき人々が、だれかを待つ様子でもなく、ただ待ち合い室の窓から離着陸する飛行機をじっと眺めていた姿が思い出される。空港に来たからといって、祖国との距離が縮まる訳でないことは明らかである。しかしこのような行動がまったく不可解と言いつつ、論じられないのは、サルトルらの哲学者によって論じられてきた数学的な空間に対比されるホドロジ的空間意識が存在するからである。ホドロジ的空間

とは、2点間の間隔が具体的に生きられ、体験されている空間のなかで、不快感や安心感などの度合いによって変化するものである<sup>17)</sup>。

望郷とホドロジ的空間意識の関係は、海の広がりを感じ方に最も明快に表れるといえよう。海は、国と国とを隔てて広がる大きな障害であると同時に、それは対岸の祖国へとつながっている。人は海を、ある時は祖国と己れとを無限に隔てるものと感じ、ある時は祖国への掛け橋と感じる。第二次世界大戦後、アメリカ兵の夫とともに海を渡った戦争花嫁は、アメリカ国内の基地を転々とした後、その多くが退役した夫とカリフォルニア州沿岸部に安住の地を得た。彼女たちがその土地を選んだ理由の一つは、海の方こうに祖国・日本があるからである<sup>18)</sup>。

#### (4) クロウスカー美莎子さん（プラハ在住）

遺されしわずかな土地を想うとき故郷はま  
だ象<sup>がたち</sup>を留む

この国に骨埋めるのですか幾度か問われ問  
わるる度の戸感い

戸籍・土地・墓、これこそ日本人にとって最も断ち難い祖国との絆ではないだろうか。日本国籍を放棄して戸籍を抹消する。祖先から受け継いだ土地を処分する。異国に骨を埋める決心をする。これらの行為は、ある意味では肉親との絆を断ち切ることもある。逆に、二度と日本に住む意志がなくとも、戸籍が残っている、あるいは故郷に土地や墓があるということは、具体的な祖国の形として、望郷を喚起すると同時に、言い知れぬ安心感を生む。筆者はアメリカで数人の日本人女性に会った折、戸籍や墓について質問してみた。彼女たちは皆、在米20年以上、夫はアメリカ人で帰国の意志はもっていない。しかし、「日本国籍は絶対に捨てない」「死んだら、遺骨の半分は日本のお墓に入れてもらうように約束してある」といった言葉を複数の人から聞いた。チェコと日本という2つの国の間を揺れ動くクロウスカー美莎子さんの心は、根づくということがいかなることであるかを自問自答し続けている。

死を「天に召される」と表現する西洋人に対し

て、日本人は「土に戻る」という言葉をよく使う。死んだ我が身は土に戻るという意識は、自ずと土となる場所へのこだわりを生む。国際結婚などで海外に移り住んだ日本人女性は、異国での生活が長くなると、自分は死んだら、どこに骨を埋めてもらいたいかを考えることが多くなるようである。それは、自分の根の所在や故郷との絆などを確かめることでもある。故郷という場所は、具体的な望郷の風景としてのみならず、自分の根の所在地、あるいは自分が究極的に返る場所という観念的な形式によっても、彼女たちの心の中に存在しているのである。

#### 5. 海外在住日本人女性の作品傾向

以上、海外在住日本人女性の投稿短歌にみる望郷を4人の作品を通して洞察してきた。最後に、5年間に『朝日歌壇』に掲載された海外在住日本人女性の望郷の歌の全体的な傾向として、どのような対象が多く歌われているかを示しておく。

望郷を喚起するものとして最も多く登場するのが、日本人になじみ深い草木（桜、つつじ、萩など）と野菜（里芋、オクラ、茄子など）である。その例としては、前述した春日あかねさんの「山つつじ……」「ほととぎす……」「葱坊主……」、モーレンキャンプふゆこさんの「秋茄子や……」「ほこほこと……」「KAKIひとつ……」「異文化の……」の他、以下のような歌もあげられる。

知らぬ間にオクラ里いもカゴに入れ故郷に  
向かうがごとき夕暮れ イギリス 飯沼鮎子

これは土地に根を張り、土地に育まれる植物という存在が、日本の風土への郷愁と結び付くからであろう。日本人は魚を好んで食するにもかかわらず、魚はほとんど歌われていないことから、単なる味覚上の恋しさからきたものではない。そこには根をもつことへの要求が存在している。シモース・ヴェーユはその著書『根をもつこと』において「根づくということは、おそらく人間の魂のもっとも重要な要求であると同時に、もっとも無視されている要求である。（中略）人間はだれでも、いくつもの根をおろす要求をいただいている。つまり、道徳的、知的、霊的生活のほとんどすべ

てを、彼が自然なかたちで参加している環境を介して受け取ろうとする要求をいっているのである。」(ヴェーユ, 1967, p.63)と述べている。だが、異国に渡った者が祖国を過去のものとして切り捨て、異郷に根を下ろし完全にその土地の内部者になり切ることはむずかしい。植物を歌うことは、海外在住日本人女性の根が祖国から断ち切れていないという現実と根を断ちたくないという意志の象徴と読み取れる。また、自然の情景に自らの思いを投影させる行為は、自然と人間の通態と呼び得る日本の文化、風土性を認めることができる。

次に多くみられるのが、日本の年中行事(ひな祭りなど)やわらべうた・童謡(かごめかごめ、赤い靴など)を歌ったものである。代表的な歌をあげてみると、

雛の宵ピーチ・ブラッサムズ飾り活け女な  
ることをひそかに祝う ポストン 劉優貴子

紙びなを西湖に流す習わしも五度日となり  
ぬわがひなまつり 中国 斉藤真木子

かくれんぼかごめかごめの輪の中の幼き孤  
独を羨しと思う  
オランダ モーレンキャンプふゆこ

初春や靴を買い来て国遠し赤き靴なり何処  
へ行かむ  
オランダ モーレンキャンプふゆこ

年中行事の歌は、主に異国でそれを守り続けている様子を歌っており、日本人としてのアイデンティティの強い主張がうかがえる。しかし、異国において繰り広げられる日本の行事は、賑わいそして消えて行く刹那的な疑似日本空間のもつはかなさを感じさせる。一方、わらべうたや童謡を歌ったものは、作者一人一人の幼少の生活風景を彷彿とさせる。作者の故郷を特定する具体的な地名が歌われていないにもかかわらず、作者の望郷の原風景がイメージとして自然と浮かんでくるのは、わらべうたや童謡の歌詞に負うものである。短歌に盛られたわらべうたや童謡の名は、日本人にある一定の風景を喚起させる記号としての役割

をもっている。だが、童謡に歌われているような風景が失われ、また童謡を知らない子供が増えている現在を考えると、わらべうたや童謡が喚起する日本人の原風景などは存在しなくなるかもしれない。

日本語に対するこだわりを歌ったものも複数みられる。代表的な歌をあげてみると、

我老いて開ける格子戸「ただいま」と叫べ  
ど叫べど答えなき夢  
オランダ モーレンキャンプふゆこ

リヤカーに我が著書積みて売る夢「毎度  
ありーい」と言いて目覚めし  
オランダ モーレンキャンプふゆこ

「がんばって!」「がんばります!」で言  
いつくす日本人のあいさつことば  
オランダ ネーダーコールン靖子

前述したルンドストロム和代さんの「遠ざかる……」もこの例に入る。「ただいま」「がんばって」などは外国語には訳しにくい。このような言葉の歌に織り込む姿勢は、海外での言葉の不自由さに由来するというよりも、日本人としてのアイデンティティの積極的な主張と受け止める。また同時に、微妙なニュアンスをもつこれらの言葉を使うことにより、本国にいる日本人との言語を媒介とした精神的な交流を求めているのではないだろうか。海外に在住する日本人女性が、日本の文壇で新人賞を獲得し、作家としてデビューする例がしばしば見られるのも、以上のような意識が創作活動を駆り立てる一因として働いているからと考えられる<sup>19)</sup>。さらには、言葉のもつ音や響きが望郷のサウンドスケープを喚起することも忘れてはならない。

## 6. おわりに

地理学者Olsson(1981)は、望郷(yearning for home)とは人間関係よりも場所と強く結び付いた感情であると述べている。それは往々にして具体的なものへの回帰という形をとってたち現れてくる。その対象物は、過去における人々とのあ

いまいな関係のなかに求められるのではなく、自分を育んだ大地との確固とした関係のなかに象徴的に存在するという。新聞投稿短歌を通して、これまで見てきた海外在住日本人女性の望郷においても、故郷の木々や草花といったものが、それらを背景にして繰り広げられた人間関係をもすべて包摂する形でシンボル化されているのを読み取ることができる。これは、Olssonの説を裏付けるのみならず、望郷とは場所に起因する、つまりは主観的な場所の経験なくしては起こり得ない感情であることを、物語っている。

はじめにも述べたように、地理学においては、海外に在住する日本人女性に関する研究は皆無に等しい。本研究は、その第一歩であり、試論である。本研究が試みた人間主義地理学からのアプローチの意義や課題は、今後地理学において、海外在住日本人女性をテーマとした複数の研究が提示された時、より積極的に議論されることになるであろう。

本論文は1994年9月に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。また本テーマに基づいた報告を、同年11月の第62回お茶の水地理学会談話会において行った。その席上、数多くの貴重な助言をいただいたことを、記して厚くお礼を申し上げる。

## 注

- 1) 外務大臣官房領事移住部編 (1993) : 『海外在留邦人数調査統計 平成5年版』より。ただし、在住国の国籍を取得し、日本国籍を放棄した者はこの数に含まれず。
- 2) 上田宣子 (1982) : 『異国体験と日本人 一比較文化精神医学から』創元社, 232P.など。
- 3) 英語圏以外の地理学については、Buttimer (1971) がフランス、Geipel (1978) がドイツの地理学の流れを、人間主義地理学の目から検証している。
- 4) 現象学はドイツの哲学者フッサールを祖とする。フッサールは、仮説—証明という科学的実証主義の態度を批判し、主体—客体の二元論を克服すべく、経験を記述する哲学というものを提唱した。本研究のタイトルにも用いた「生活世界 (lifeworld)」は、主体と客体が最も深い交わりをもつ場所として、フッサールによって提示されたものである。フラン

スの哲学者メルロ・ポンティは、フッサール現象学の影響を受け、特定の人々、社会、文化の生活世界というものに注目し、そこに描き出される日常性の意味の探求を試みた。メルロ・ポンティの現象学を一般に実存主義現象学と呼び、人間主義地理学はそれに負うところが大きい。

- 5) Relph, E. (1976) : *Place and placelessness*. Pion, 156P. 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学』筑摩書房, 1991, 277P.
- 6) ヴェーユの生涯については、田辺 (1968) に詳しい。なお、トゥアン (1991, iii) は、最も影響を受けた哲学者として、マードック、ウィトゲンシュタインと並べてヴェーユの名前をあげている。
- 7) Tuan, Yi-Fu (1974) : *Topophilia, A Study of Environmental Perception, Attitudes, and Values*. Englewood Cliffs, 260P. 小野有五・阿部一訳『トポフィリア』せりか書房, 1992, 446P.
- 8) 竹内 (1979, p.661) は、アメリカの都市において、郊外にも移住することができずに都心に住む黒人低所得者層が、都市に対してもっている否定的な感情を、その例としてあげている。
- 9) 河出書房新社編 (1992) : 『[同時代]としての女性短歌』 p.378.
- 10) 同上 p.402.
- 11) 例えば、朝日新聞は1986年1月ロンドンを皮切りに、国際衛星版の発行を開始した。同新聞の投稿短歌欄担当記者の話によると、海外からの投稿は、国際衛星版発刊以前から見られたが、投稿者の顔ぶれは永住者を中心にほぼ一定していた。しかし最近では、駐在員の妻や留学生からの投稿も多くなり、掲載が呼び水となって、新たな投稿者を増やしている。
- 12) 例えば、1922 (大正11) 年25才でユタ州ソルトレイクシティに在住する日本人男性のもとに嫁ぎ、夫が創刊した日本語新聞『ユタ日報』を、夫亡き後も95才でこの世を去るまで発行し続けた寺沢国子の生涯を描いた上坂冬子 (1992) : 『おばあちゃんのユタ日報』には、日系人の祖国日本に対する思いの表現として、同紙に寄せられた短歌がしばしば引用されている。なお、アメリカにおける日本語新聞の歴史に関しては田村 (1991)、日系人女性に関してはナカノ (1992) に詳しい。
- 13) 海外日系新聞協会に登録されているアメリカ本土発行の日本語新聞は以下の6紙。  
羅府新報 (ロサンゼルス)、日米時事 (サンフランシ

- スコ)、北米毎日(サンフランシスコ)、北米報知(シアトル)、ロッキー時報(デンバー)、シカゴ新報(シカゴ)。ちなみに、6紙のうち、北米毎日、北米報知、ロッキー時報、シカゴ新報の4紙の編集長は女性である。
- 14)河出書房新社編(1992):前掲p.404.
- 15)外務大臣官房領事移住部編(1993):  
前掲p.218. 日系人とは日本国籍を有しないが、日本人の血統をひく者(帰化一世及び二世・三世など)をいう。このほかメキシコには日本国籍を有する永住者が約1,400人いる。
- 16)道浦母都子・坪内稔典(1991):『女うた 男うた』リプロポート, pp.97-8.
- 17)ボルノウ(1988):『人間と空間』せりか書房, pp.183-192.
- 18)江成常夫(1981):『花嫁のアメリカ』講談社, 336P.
- 19)代表的な作家をあげると、大庭みな子(1968年『三匹の蟹』で芥川賞受賞, アメリカ在住〔当時〕)、米谷ふみ子(1985年『過越しの祭』で芥川賞受賞, アメリカ在住)、野中柊(1991年『アンダーソン家の嫁』で海燕新人文賞受賞, アメリカ在住)、多和田葉子(1993年『犬婚入り』で芥川賞受賞, ドイツ在住)など。

## 文献

- 朝日新聞東京本社学芸部編(1989):『朝日歌壇 '89』朝日ソノラマ, 228P.
- (1990):『朝日歌壇 '90』朝日ソノラマ, 222P.
- (1991):『朝日歌壇 '91』朝日ソノラマ, 222P.
- (1992):『朝日歌壇 '92』朝日ソノラマ, 222P.
- (1993):『朝日歌壇 '93』朝日ソノラマ, 222P.
- 阿部一(1990):『景観・場所・物語 —現象学的景観研究に向けての試論—』地理学評論, 63A-7, 453-465.
- ヴェーユ, シモーヌ著, 山崎庸一郎訳(1967):『根をもつこと —シモーヌ・ヴェーユ著作集 V—』春秋社, 379P.
- 内田忠賢(1990):『江戸人の不思議の場所 —その人

- 文主義地理学的考察—』史林, 73-6, 115-142.
- 大島襄二・浮田典良・佐々木高明編著(1990):『文化地理学』古今書院, 408P.
- 奥野健男(1989):『増補 文学における原風景 —原っぱ・洞窟の幻想—』集英社, 302P.
- 加藤典洋(1990):『日本風景論』講談社, 333P.
- 上坂冬子(1992):『おばあちゃんのユタ日報』文春文庫, 302P.
- 河出書房新社編(1992):『[同時代]としての女性短歌』河出書房新社, 421P.
- 杉浦直(1991):『日系人社会と民族的組織』地理, 36-5, 41-47.
- 高津斌彰(1991):『日系企業の直接投資とその問題』地理, 36-5, 48-54.
- 竹内啓一(1979):『主観の地理学からの逆照射 —社会地理学の位相—』一橋論叢, 81-6, 1-15.
- 田辺保(1968):『シモーヌ・ヴェーユ —その極限の愛の思想—』講談社現代新書, 236P.
- 田村紀雄(1991):『アメリカの日本語新聞』新潮社, 236P.
- トゥアン, イーファー著, 山本浩訳(1991):『モラリティと想像力の文化史 —進歩のパラドクス—』筑摩書房, 314P.
- , 小野有五・阿部一訳(1992):『トポフィリア —人間と空間—』せりか書房, 446P.
- ナカノ, メイ著, サイマル・アカデミー翻訳科訳(1992):『日系アメリカ女性 —三世代の100年—』サイマル出版会, 285P.
- 中村雄二郎(1979):『共通感覚論 —知の組みかえのために—』岩波現代選書, 349P+7.
- 福田珠己(1991):『場所の経験 —林芙美子の「放浪記」を中心として—』人文地理, 43-3, 69-81.
- ベルク, オギュスタン著, 篠田勝英訳(1988):『風土の日本 —自然と文化の通感—』筑摩書房, 370P.
- ポコック, ダグラス・ポーティウス, ダグラス著, 米田巖・湯山健一訳編(1992):『心のなかの景観』古今書院, 247P.
- ボルノウ, オットー・フリードリッヒ著, 人塚恵一・池川健司・中村浩平訳(1978):『人間と空間』せりか書房, 324P.
- 前田愛(1982):『都市空間のなかの文学』筑摩書房, 507P+15.

- 道浦母都子・坪内稔典 (1991) : 『女うた 男うた』  
リポレポート, 167P.
- 山野正彦 (1979) : 空間構造の人文主義的解読法 —  
今日の人文地理学の視角—. 人文地理, 31-1, 46  
-68.
- レルフ, エドワード著, 高野岳彦・阿部隆・石山美也  
子訳 (1991) : 『場所の現象学 —没場所性を越え  
て—』 筑摩書房, 274P.
- Buttimer, Anne (1971) : *Society and Milieu in the  
French Geographic Tradition*. Rand McNally and  
Company, Chicago, 226P.
- (1976) : Grasping the Dynamism of  
lifeworld. *Annals of the Association of American  
Geographers*, 66-2, 277-292.
- Geipel, Robert (1978) : The Landscape Indicators  
School in German Geography. In Ley, David  
& Samuels, Marwyn S. (eds.) : *Humanistic  
Geography : Prospects and Problems*. Croom  
Helm, London, 155-172.
- Godkin, Michael A. (1980) : Identity and Place :  
Clinical Applications Based on Notions of Root-  
edness and Uprootedness. In Buttimer, Anne and  
Seamon, David (eds.) : *The Human Experience  
of Space and Place*. Croom Helm, London, 73-  
85.
- Olsson, Gunnar (1981) : On Yearning for Home : An  
Epistemological View of Ontological Trans-  
formations. In Pocock, Douglas, C.D. (ed.) :  
*Humanistic Geography and Literature : Essays  
on the Experience of Place*. Croom Helm Londo-  
n, 121-129.
- Porteous, J.D. (1985) : Literature and Humanist  
Geography. *Area*, 17, 117-122.
- Samuels, Marwyn S. (1978) : Existentialism and  
Human Geography. In Ley, David and Samuels,  
Marwyn S. (eds.) : *Humanistic Geography :  
Prospects and Problems*. Croom Helm, London,  
22-40.
- Schafer, R. Murry (1985) : Acoustic Space. In  
Seamon, D. and Mugerauer, R. (eds.) : *Dwelling,  
Place and Environment : Towards a Phenome-  
nology of Person and World*. Columbia University  
Press, New York, 87-98.
- Seamon, David (1985) : Reconciling Old and New  
Worlds : The Dwelling-Journey Relationship as  
Portrayed in Vihelm Moberg's "Emigrant" Nov-  
els. In Seamon, D. and Mugerauer, R. (eds.)  
*Dwelling, Place and Environment : Towards a  
Phenomenology of Person and World*. Columbia  
University Press, New York, 227-245.
- Smith, Susan J. (1984) : Practicing Humanistic  
Geography. *Annals of the Association of the  
American Geographers*, 74-3, 353-375.